

人間・環境学フォーラム

文

明

と

疾

患

二〇〇九年四月七日

人・環境棟地下大講義室

講演会 一六時～一七時三〇分

講師

津田謹輔

糖尿病よもやま話

川島昭夫

1665年のパンデミック

— デフォー『疫病流行記』の世界

懇親会19:00~20:30

京都大学生生活協同組合吉田食堂

参加費 教員3000円 在学生・職員1000円 新入生500円

第21回 人間・環境学フォーラム 新入生歓迎記念講演会

『文明と疾患』

4月7日(火) 16:00-17:30 人間・環境学研究科棟地下大講義室

司会 斎木 潤 (人間・環境学研究科共生人間学専攻)

糖尿病よもやま話

津田 謹輔 先生 (人間・環境学研究科共生人間学専攻) 16:10 — 16:40

糖尿病は、わが国の5~6人に一人が罹患しており平成の国民病といわれる。放置すると失明、血液透析、動脈硬化を引き起こし、患者さんの生活の質や寿命に影響を与え、医療経済に深刻な影響を与えている。糖尿病は、インスリンの作用不足から生じるが、その発症には遺伝素因と環境要因が複雑に関連している。インスリンは膵ホルモンの1つにすぎないが、インスリンに関連した研究でノーベル賞が4件もある重要なホルモンである。インスリンは、糖尿病だけでなく、肥満や動脈硬化、また最近注目のメタボリックシンドローム、さらには寿命のキーホルモンである。糖尿病をひきおこす遺伝子は未だ明らかになっていないが、儉約遺伝子という考え方がある。飢餓の時代を生き延びるのに有利だった遺伝子が、逆に現代では肥満などを引き起こすというものである。環境因子では食事と運動、ストレスが重要である。食事には、栄養学というサイエンスと同時に食文化の側面がある。身体活動ではニート(non-exercise activity thermogenesis)が注目されている。このように糖尿病の研究は様々な分野にわたる。これらの詳しい話は、専門の授業に譲り、フォーラムでは生活習慣病や食べることについて肩のこらない四方山話をして、これから皆さんが充実した研究生生活を送る前提となる健康について考えてみたい。

1665年のパンデミック — デフォー『疫病流行記』の世界

川島 昭夫 先生 (人間・環境学研究科共生文明学専攻) 16:45 — 17:15

ペストは感染した患者が死亡する確率が高く、またその時、死体が異様に黒く変色するというので「黒死病 black death」として恐れられた。近代初期までのヨーロッパの人々は、少なくとも生涯に一度は、流行に直面し、死の恐怖におびえざるを得なかったといわれる。

イギリスにおける最後の大流行は1665年のことであった。前年の冬にロンドンで初めて患者の死亡が確認され、この都市の夏には一気に流行は拡大した。ロンドンにおける死者は、葬儀も埋葬も追いつかないほどであった。そのうえ多くの市民はペストを恐れて地方に脱出し、医師までもが逃亡した。患者や死者は看取る人もなく放置され、あるいはただ地面に掘られた大きな穴に投棄された。

「ロビンソン・クルーソー」の物語で有名な、18世紀の小説家D・デフォーは、1722年に『疫病流行記 A Journal of the Plague Year』を著した。これは流行時にロンドンに止まった人物が記した日記に形を借りた小説だが、同じ経験をしたデフォーの伯父に取材したもので、事実に基づいた迫真の記述である。この小説を手がかりに、パンデミックの渦中のロンドンで何が観察されたか、そしてその経験が何を人々に残したかについて考えてみる。